

障害児・者及び家族を地域で支えるための連携した支援体制づくりに関する研究

大川眞智子 岩村龍子 杉野緑 梅津美香 大井靖子 平山朝子 (大学) 橋本詩子 柴田恵津子
小山美香 赤嶺真理 佐藤沙夜香 服部寛子 (羽島市保健センター) 安藤邦章 杉山麻紀子 (知的
障害者更生施設羽島学園) 熊崎千晶 (生活サポートはしま)

I. はじめに

本研究は、平成16年度から、障害児者と家族が安心して生活できるための地域づくりの一環として、連携した支援体制づくりを検討することを目的として取り組んでいる。昨年度までは、在宅の知的障害児者と家族に焦点をあてた取り組みであり、家族への聞き取り調査の結果を対象家族や民生委員・関係職種に報告し、意見交換することで支援のあり方について検討してきた。

今年度は、在宅の精神障害者を対象にしたA保健所主催のグループワーク(以下、GW)が、今後、市町村の取り組みとして移行するのに伴い、その準備として、B市居住の当事者・家族の生活実態・気持ちを把握し、ニーズに即した支援のあり方を検討することに取り組んだ。そこで、保健所GWの利用者及び家族会のメンバーに聞き取り調査を実施し、さらに、調査対象者への調査結果の報告と意見交換を行なったので報告する。

倫理的配慮として、調査対象者には、本研究の趣旨及び個人情報保護に留意することなどを説明し、同意を得た上で、聞き取り調査と意見交換を実施した。また、本取り組みは、本学の研究倫理審査部会の承認を得ている。

なお、全取り組みについて、現地側共同研究者と一緒に企画・実施した。

II. 保健所GW利用者を対象とした調査

1. 対象・方法

B市居住のA保健所GW利用者のうち、了解が得られた3名を対象に、保健所もしくは対象者の自宅で聞き取り調査を実施する。

2. 調査内容

現在の日中活動、GWについて(今までの参加状況、参加して良かったこと、今後の開催方法・内容の希望)等

3. 調査結果

- 1) 回答者: 30歳代~50歳代の3名
 - 2) 日中活動: 保健所GWに行かない日は、家事・農作業・買い物等をして暮らしている。
 - 3) 今までの保健所GWについて
- ① 参加状況: 時々休みながらも、全員が7年以上参加をしている。

- ② 参加して良かったこと: 「気分転換できる、一人でできないことができる、楽しい」等で、全員が肯定的反応だった。
 - ③ 困ったこと: 「開催場所の保健所まで遠くて交通費がかかる」1名
 - 4) 移行後のGWについて
- ① 移行後のGWへの参加意思: 「参加を希望する」1名、「わからない」2名
 - ② 希望内容: 卓球・バドミントン・カラオケ・調理・パソコンなど
 - ③ 開催場所: 全員が居住地の保健センターでの開催を望んでおり、他市町とのローテーション開催は望んでいなかった。
 - ④ 開催頻度: 月1回2名、毎週1名
 - 5) 今後の生活についての気持ち・考え
 - ・農業しながら暮らす。障害年金が減額されると困る
 - ・先のことは考えない。良くも悪くも考えず、今を一生懸命生きていく
 - ・昔の友人と話をしたい
 - 6) 安心して暮らすために望むこと
 - ・行政における障害者支援スタッフの充実
 - ・友達のように気軽に相談したい

III. 家族会員を対象とした調査

1. 対象・方法

主にB市に居住する精神障害者家族の自主組織であるC会(家族会)会員11事例のうち、了解の得られた4事例の自宅に訪問し、聞き取り調査を実施する。

C会は、月に1回定例会を開催しており、運営にはA保健所保健師が支援している。今回の調査対象者は、定例会に殆ど休まず出席するメンバーである。定例会のうち、クリスマス会など年に数回は、A保健所GW利用者も参加しており互いに面識がある。なお、A保健所GW利用者の家族は、C会に所属していない。

2. 調査内容

当事者・家族の現在の状況、今後のGWへの希望、家族会への気持ち・考え、今後の生活や行政への希望等

3. 調査結果

1) 回答者：4事例の親6名(60歳～80歳代)。なお、当事者である子ども2名の意見も部分的に聴取できた。

2) 当事者：30歳代～50歳代

3) 当事者の日中活動：3事例が家事、家族との外出、病院デイへの参加等をしており、家族会定例会に親と参加し、定例会以外での親子間交流もある。一方、1事例は外出や他者との交流が殆ど無かった。

4) GWについて：A保健所のGWには、当事者の4事例全員が参加したことはない。なお、移行後のGWには、「親として本人が希望するなら参加させたい」1事例であった。

5) 家族会への参加について

① 参加年数：2年1事例、10年1事例、20数年2事例

② 参加状況：毎回参加4事例

③ 家族会に参加して良かったこと

ア) 共感して話せるのでストレス解消になる：「気分転換できて心にゆとりができる、身分を明かさずに話し合いができる、互いに共感できる、ストレス解消となる、自分だけでないと心強い」などの意見が4事例全員から確認された。

イ) 知識情報が役立つ：「講演会で話を聞ける、障害年金を知って手続きした、自立支援法の情報が入る、治療費・新薬の情報交換ができる」などの意見が、2事例で確認された。

④ 家族会についての気持ち・考え

・家族会の広報やチラシを見て問い合わせはあっても入会までに至らない

・居住地の家族会には、参加しにくいと思う人もいる

・家族会が開催される施設に入っていくのを他者に見られることすら嫌がる人がいる

・親の高齢化で家族会の会員数が減少してきた

・送迎などの同居家族の協力がないと、高齢な親は参加できなくなってきた

・若い人は家族会に参加しない現状がある

6) 安心して暮らすために望むこと

① 当事者の意見

ア) 訪問看護サービス：「病気のことを理解して時々訪問してくれる訪問看護サービスがあるとよい、親がいなくなって一人暮らしができるのが心配なので訪問看護師が様子を見に来てくれるとよい、様子を見に来てくれればエネルギーをもらえて次につながる」1事例

イ) グループホーム：「訪問看護が難しければ

グループホームで暮らす、グループホームは自分の調子が悪くなったときに支えてくれる人がいるからよいが本当は入りたくないし考えたくないけど支えてくれる資源の一つと思う」1事例

② 家族の意見

ア) グループホーム：「グループホームがあればよい」1事例

イ) 作業や就労できる場：「作業もできるデイケアがあるとよい」、「作業所など人とつながり社会に慣れていくために必要」各1事例

ウ) 安心して集えて話せる場や相手：「X市の家族会が設立・運営している喫茶店のように本人と家族が集って話せる場があるとよい」、「本人が安心して行きたいときにふらっと行ける場所があるとよい」、「外に出て話せる相手ができる」とよい」各1事例

7) その他、家族の意見

- ・できるだけ家族が元気で長く見守っていきたい
- ・現在困っていることは、本人の食事の用意があるので半日までしか家を空けられないこと
- ・親が看られなくなったら、入院させてもらえない

IV. 調査対象者への調査結果の報告と意見交換

1. 実施方法・内容

平成19年12月の家族会定例会において、調査結果を参加者に報告し、意見交換を実施した。開催場所は、B市保健センターである。

2. 参加者

家族会員4世帯(親5名、子ども3名)、A保健所GW利用者1名、A保健所保健師1名、B市保健師1名、教員3名であった。

3. 意見交換の内容

- ・精神疾患について専門的な勉強をしていてアドバイザーのできるスタッフが充実してほしい。
- ・家族が気軽にいつでも相談できる24時間専用ダイヤルがあるとよい。
- ・当事者は、身体的疾患に関する医療受診を遠慮しがちである。
- ・近隣の家族会が中心になって、喫茶店や農業など楽しそうな活動をしていることがテレビで紹介されていたので見学に行きたい。
- ・家庭のことを忘れて話し合える家族会の存在は大きい。当事者も、家族会に参加するのを楽しみにしている。
- ・保健師が家族会のPRチラシを病院に配布したが、新規加入者はいない。個人的なかかわりを希望する人はいても、家族会への参加・加入ま

でに至らない。

V. 考察

1. 当事者と家族への支援

A 保健所 GW 利用者を対象にした調査結果から、概ね保健所 GW が移行することに肯定的であることが分かった。また、開催場所は居住地である B 市の保健センターを希望しており、居住地であるがゆえに他者の目を気にして参加しづらいということはないようである。しかし、今回の調査対象以外で、居住地の GW への参加しづらさを感じる当事者は少なくないと思われるため、近隣市町での GW や集いにも参加できる選択肢は勿論、その周知を十分に行うことは必要と考える。

家族会員を対象とした調査や意見交換からは、家族会の存在は、親のストレス解消や心の支えとなっているだけでなく、有用な知識・情報を得る場になっており、当事者と家族の生活を豊かにする側面もあることが確認された。一方、家族会員である当事者の親の高齢化が進み、新規加入者もないため、運営困難な状況にあることがわかった。そこで、移行後の GW に家族会員が気軽に参加できるようにするなど、家族会への支援を視野に入れた GW の開催を検討していくことが必要と思われた。

また、親の亡き後の生活を不安に思う当事者・親自身の思いや、訪問看護サービス・グループホームを求める意見が確認された。そこで、当事者・家族が希望する暮らしを実現させるために、地域内の資源・サービスを確認した上で、より充実・開発する必要のある資源やサービスについて関係機関と一緒に検討していくことが重要と考える。

2. 今年度の取り組みが現地側共同研究者の実践活動に与えた影響

本調査結果や意見交換を踏まえて、移行後の GW をどのように企画・運営していけばよいのかを含めて当事者支援のあり方について、B 市及び近隣の保健・福祉関係者と検討した。

本取り組みを通して、当事者や家族会のニーズを検討したことに加えて、当事者・家族個々との信頼関係を深める機会になり、今後の援助につながる相談回路を開くことができたと思える。

VI. 共同研究報告と討論の会での討議内容

現地側共同研究者から、GW の移行に向けて、近隣自治体と協議している現状や精神障害者の方が気軽に通える場をつくっていききたいという

抱負が話された。また、地域における精神障害者に対する支援の現状について情報交換を行った。その具体的内容は、以下のとおりである。

<D 市>

- ・GW：保健所では実施していない。月に 1 回、地域生活支援センターで実施。毎回 5～7 名参加。手帳申請のため市役所来所時に GW 対象者へ声をかけて参加勧奨。保健センターでも、地域の仲間とつながることを目的に開催している。
- ・家族会：3 ヶ月に 1 回開催。家族会の中心となりそうな人に保健師が声をかけて発足に至った。家族が主体的に動いていくことを意図したかわりを心がけている。
- ・精神保健福祉ボランティア養成：講習受講者は、身内に精神障害者がいる方が多い。講習修了後、ボランティアとして GW に参加してもらっている。本活動を通して、地域の中に理解者が確実に増えていくと考えている。

<E 市>

- ・市内に精神保健福祉に関する資源が多く、作業所など当事者が集まる場はある。
- ・家族会：作業所などの資源ごとに家族会が存在している。

<F 病院>

- ・退院後の地域生活を支援するための部署を設置。
- ・市町村によって取り組みや社会資源の状況は様々である。県内市町村の関係情報が集約していると情報提供しやすい。当事者や家族にとっても、選択肢が分かりやすく提示されるとよい。

VII. 終わりに

今年度の取り組みや共同研究報告と討論の会での討論を踏まえると、GW や家族会へのかかわりによって当事者と家族を支えていく一方で、ボランティア養成など地域の中に理解者を増やす活動をすすめていくことが安心して暮らせる地域づくりの基盤として重要だと考える。

なお、当事者・家族・ボランティアへのかかわりについては、今後これらの三者がつながりをもてるように GW・家族会やボランティア養成の各活動が連動していくことが必要であると思える。また、民生委員など、問題意識があり、身近な支援者として機能していくことが期待される方々にも働きかけ、地域の課題として一緒に検討し、連携した支援体制づくりにつなげていきたい。

最後になりましたが、今回の調査や意見交換に快く協力していただいた皆様に深く感謝いたします。